

「青橋由高短編集12

メイドハーレムなんて許しません!？」

青橋由高あおはしゆたか (著)
ぢたま(某) (イラスト)

「特別扱いしてくれないと許しません！」

「レカ様、私、お暇をいただきたいのですが」

「……………っ……………っ……………!？」

メイド兼護衛兼教育係兼見張り役である幼なじみのサキ・クドーが発した一言に、
マータ国第一王子のレカ・ダインは驚愕と困惑と恐怖とに襲われた。

「なななっ、どどどっ」

なにがどうしたのだ、と口にするはずのセリフはまともな言葉にならない。書類へ
サインするためにとっていたペンを落とす、政務室の床に転がしてしまう。

「質の低いおつむだとは承知しておりましたが、ついに言葉すら怪しくなるレベルま
で劣化されましたか。私の予想よりも若干、発症が早かったですね」

お馴染みのクールな表情のまま、サキがペンを拾い上げる。

「お前、俺への暴言の斬れ味がさらに増してないか!？」

「いついかなるときでも私の肌を視姦することを忘れない、あなたみたいな歩く性欲
と毎日毎日、朝から晩まで顔を突き合わせていればこうもなります」

主を淡々と罵りつつも、十九歳のメイドはやたらと露出度の高いエプロンドレスに

包まれた己の肌を隠す素振りはない。むしろ軽く胸を張り、大きく飛び出した胸の谷間をアピールしているようにも見える。

(くっ、我がデザインながら、なんて素敵エロいメイド服なのだ！ 柔らかバストが形作る深い溪谷が俺の視線を釘付けにする……！)

「まあ、確かに毎日毎日、朝から晩まで突き合わせてますわね、わたくしたち。主に下半身を」

「ふふふ、あるじどの 主殿の突きは実に見事なものであったな。実はわたしの腰にはまだ少々ダメージが残っている」

「おいそこ、茶々を入れるな」

執務室とともに仕事をしていたゼノビア・ブリクセンとライヤ・ウリンを軽く睨みつけてから、レカは再びサキに視線を戻す。今度は胸ではなく、そのややキツめの目に。

「サキ、なにが不満だ？」

「おや、まさかあなたに仕えていて、不満を覚えないところがあるところでもお思いですか？ 自分のことは見えにくいと言いますが、レカ様はその傾向が特に顕著でございますね」

拾い上げたペンをレカに手渡しながら、サキがふふん、と笑う。現在、実質的に国

のトップとなった第一王子に対してメイドがしている態度ではないが、この場にいる誰もがおかしいとは考えない。レカ自身も含めて。

「お、俺が至らない王子なのはわかってるが、その、お、お前はそれも含めて納得した上で側にいてくれると思ってたのだぞ？ それなのに、なぜ今さら」

「もしかしてレカ様、なにか勘違いされてませんか？ お暇をいただきたいというのは、言葉どおりの意味でございますよ？」

「は？ お前、俺のメイドを辞めたいわけじゃないのか？」

「違いますよ。実家の用事ができたので、一日、お休みをいただきただきたいだけです。：そんなに私に、専属で特別なメイドに辞められると困るのですか？」

サキがくすくすと笑い出す。優越感に満ちたその表情にかちんと来るが、安堵の気持ちのほうが大きいため、レカは軽く唇を尖らせるだけにとどまる。

「ふん、言わなくてもわかってるだろうが。……で、用事とはなんだ？」

仕返して今夜はたっぷりといじめ可愛がってやるぞと心に決めつつ、尋ねる。

「父方の親戚の結婚式に出席するためです」

「なるほど。許可しよう。ついでに、俺もなにか祝いの品を出すか」

「？」

「不思議そうな顔をするな。父方の親戚ならば、お前やおっさん……ブゾー殿の身内

ということだ。俺にとっても他人ではないからな」

サキの実父であるブゾー・クドーはマータ国の元騎士団長で、レカの剣術の師匠でもあった。レカにすると、もう一人の父親のような存在だ。

「た、確かに私とレカ様は特別な関係でございますから、身内と言っても間違いないですね、ええ」

なぜだか目をぽっと染めたサキがもぞもぞし始める。そして、そんなサキを見て他のメイドたちも口を開く。

「ずるいですわご主人様！ でしたらわたくしの親戚の結婚式の際にも是非！」

「いや、お前の親戚、ろくなやついないだろ」

「そ、そうでしたわ、わたくし、不幸な星の下に生まれたんでしたわ！」

身内に散々裏切られてレカの元に逃げ込んできた元お嬢様がいつものセリフを吐く。

「主殿、わたしの身内の式があったときにもお願いしていいだろうか？」

「ダークエルフとの今後の友好的関係を考えれば、やらない理由もないが………そういう予定はあるのか？」

「ないな。少なくとも、葬式は滅多にない」

人間とは比較にならないほどの長寿を誇るダークエルフが首を振る。

「ミラはどうなんだ？　なかなか可愛い顔をしてるしな、婿になりたがる男は多いのではないか？」

ミラは、ライヤの跡を継いで（押しつけられた、が正しいが）ダークエルフの里のトップとなった少女だ。暇なのかなんなのか、しばしば城にやって来てはレカに絡んでくる。

「……主殿、その言葉、ミラには言わないほうがいいぞ」

「レカ様はホントに残念な方でございますね」

「ご主人様、今のはちょっと酷いですわ……」

メイド三人に同時にため息を吐かれてしまう。

「な、なんだ、その反応は？　俺はなにか間違ったことを言ったのか？」

その理由がまったくわからないレカが聞くが、ライヤもサキもゼノビアも、なにも言ってくれなかった。

「ほう。珍しい客人だな、ブゾー殿」

「お忙しい中、突然押しかけて申し訳ございません、レカ王子」

レカの元にブゾー・クドーが来訪したのは、サキが休暇を取る三日前のことだった。

「公式の場ではないからそのような堅苦しい態度はいらんぞ、おっさん。背中がむずむずする」

第一線を退いたとはいえ、現在も相談役として若手の稽古をつけている元騎士の巨体を見上げながら、レカが手をひらひらと振る。

「ふむ、では楽にさせてもらおうか、小僧」

王子の許しが出た途端にやりと笑ったブゾーは、応接間のソファにぼすん、と勢いよく腰かけた。レカもその向い側に座る。

「サキを呼ばなくてもよいのか？」

「あいつには聞かれたくないのにな」

「……面倒な話なのか？」

「それなりに。そして、我が娘、サキに関わる話なのだ」

「ほう。続きを話してくれ」

レカは身を乗り出す。サキの話とあらば、真剣に聞かないわけにはいかなかった。

「あれが結婚式に招待された話は？」

「無論、承知している。休暇もすでに出した」

「式のあと、身内だけで食事が予定されているのは？」

「そこまでは知らん。……ただの食事会ではないのだな？」

「うむ、サキも知らされてないのだが、実は見合いがセッティングされている」

「んなっ……!?」

レカの腰がソファから浮きかける。

「見合いの相手はサツテ・クドー、オレの兄貴の息子、つまりオレの甥で、サキにとつての従兄だ」

「おっさんの兄貴には、確か子供がいなかったはずでは？」

「よく覚えてるじゃないか、バカ王子にしては」

「うるさいぞ、父娘揃って人をバカバカ罵りやがって。クドー家の教育はどうなっている」

「そのセリフ、そっくり返してもいいか？ ダイン家の教育はどうなってるのか、と」

「それ、下手すると王家に対する不敬罪だからな？ 外では言うなよ？ いくらおっ

さんと父上の仲でもな。あと、俺の教育係はお前の実の娘だってこと忘れるなよ？

ボケるのはまだ早いぞ」

気心の知れた同士、立場を超えて軽口を叩き合う。

「兄貴は少し前、養子をとったんだ。それがサツテだ。で、そのサツテがどこかでサキを見初めたらしく、今回の結婚式にかこつけて見合いの場を強引に用意したんだぞうだ」

「らしい、だの、そうだ、だの、おっさんにしては煮え切らない言い方だな？」

レカの表情と声に、隠しきれない苛立ちが滲む。

「オレも蚊帳の外で、この情報も知ったばかりなんだ。……ずいぶんと不機嫌じゃないか、小僧。うちの娘が奪われるのがそんなにイヤか？」

「……ああ」

誤魔化せる相手ではないとわかっていたので、レカは渋々頷く。

「そうか。くくくっ」

そんな王子の反応を見て、元騎士団長が楽しげに笑う。

「なにがおかしい。……あいつは、サキは俺の専属メイドだ。悪いが、まだ手放す気はないぞ。俺はあいつに返さなければならん借りが山ほど残っている」

「オレに言われても困る」

「アンタ、父親だろう。その見合い、なんとかできんのか」

「残念ながらオレは一族であまり強い立場になくてな」

嘘を吐くな嘘を、とレカは胸の内で舌打ちをする。

第一線を退いたとはいえ、現在も騎士団の要職にあり、第一王子の実質的後見人であり、国王の信頼も厚いブゾーより立場の強い人物など、マータ国内には数えるほどしかない。

(このおっさん、なにを企んでおるのだ?)

子供の頃から色々からかわれたりした苦い経験がある王子は、探るように目の前の男を睨む。

「その、自称立場が弱い元騎士団長様は俺を、第一王子をどう動かしたいのだ? 狙いはなんだ? 正直に吐け」

「人聞きの悪いことを。それではまるで、オレが小僧に、いや、わたくしが聡明なるレカ王子を利用してるみたいではありませんか」

「茶番はいらん。用件だけを言え」

「くくくっ、短気を起こすな。外交でミスをするぞ?……これが食事会の、いや、見合いが行われる予定の場所と時間だ」

ブゾーは懐から一枚のメモを取り出し、レカに手渡す。

「二国の王子に娘の見合いを潰させるなど、立場の弱い人間の発想ではないと思うがな」

「オレは別に潰せなどとは一言も口にしてないが?」

苦虫を噛み潰したようなレカとは対照的に、ブゾーは片頬を持ち上げてにやりと笑う。

「……よかろう。今回はおっさんの策略に乗ってやる。だが、手引きくらいはやって

もらどうぞ、いいな？」

「もちろんだ」

そう言って、ブゾーはもう一度笑った。

顔の作りは全然似ていないのに、その笑みがサキとそっくりに感じられるレカだった。

(俺はいつたいたいなにをしてるのだろうか。一国の王子としてこれはまずいのではないだろうか)

三日後、信頼できる協力者数人を巻き込み、こっそり城を抜け出したマータ国第一王子は、突然我に返った。返ってしまった。鏡に映った己の姿を見たせいだった。

(ゼノビアとライヤのセンスを頼ったのは重大な失敗だったのではないか?)

今、レカはブゾーからリークされた情報を元に、サキが見合いをするらしい屋敷の中にいた。屋敷への侵入を手引きしてくれたのはブゾーだ。

屋敷の持ち主はサキを見初めたというサツテの義理の父、つまりブゾーの兄だ。商売人としてなかなかの成功を収めている人物である。

(王子である俺が国民の住居に不法侵入した時点でとっくにアウトだったのに、この

格好はやばすぎないか？)

部屋に置かれた鏡には、鍰の広い帽子と顔の上半分を隠すマスク、全身にぴったりとフィットした黒い服を着用した、ザ・不審者と表現するほかのない格好の男が映っていた。

(確かに俺は、正体がばれないような変装をリクエストしたが……)
相談した相手を間違えたと、今更ながらにレカは悔やむ。

(だが、これならこの変態マスクが高貴なる第一王子だとはわかるまい。その点だけを心の抛り所にして諦めるか)

もっとも、肝心の変装レベルも、少しでもレカを知っている人物であれば一発で正体がわかる程度だ。その事実気づいてない時点で、レカもゼノビアとライヤのセンスを笑えない。

(おっさんの話だとそろそろ見合いが始まる頃合いか。さっさとぶち壊してやろう)
腰に携えた模擬刀を握る手に力が籠もる。手荒な真似をしないで逃亡できればいいが、と願いつつ、ドアを開ける。

全身怪しさで充ち満ちた変態王子は足音を忍ばせ、幼なじみメイドが見合いをしている場所へと小走りで行った。

(なんなのかしら、これは)

結婚式が終わったあと、身内だけで茶会を開くからと半ば強引に連れて来られた伯父の屋敷で、サキは小さく、しかし深いため息を吐いた。

「顔を合わせたのは何度かあったけど、こうしてちゃんと話すのは初めてかな、サキ」
そんなサキに爽やかな笑顔で話しかけてきたのは、伯父の養子となった青年サツテ・クドーだ。つまりはサキの血の繋がらない従兄だが、養子になったことも最近聞かされたばかりで、どのような人物か、年齢も、既婚か否かすらも知らない間柄だった。「そうですね。仕事柄、なかなか実家には帰れませんので、今日の結婚式は親類と久しぶりに会えて楽しかったです」

突然サツテと二人きりにされたことへの不信感を顔には出さず、愛想笑いで返す。レカを相手にするときには必要のない表情である。

城の応接室よりも豪華な部屋で、レカ以外の若い男と二人きりという状況は、サキにとって少なくとも負担だった。それがたとえ身内で、爽やかな青年であっても。

「レカ王子の評判を最近よく聞くけれど、実際のところはどんなんだい？」

「それは商人としての質問ですか？ 言っておきますが、政に関する情報はたとえ従兄であってもお話しできません」

「ははは、違う違う、ただの世間話だよ。いや、僕ときみのあいだではあまり共通の

話題がないだろう？ レカ王子についてなら、きっとサキは色々話してくれると思っ
てね」

「……最近は、多少はましになってきましたかね、うちのバカ王子は」

少し悩んだのち、サキはサツテが振った話題に乗ることにした。確かに自分たちに
共通する話題はそれほど思い浮かばないし、なにより、レカについてならいくらでも
ネタがあるからだ。もちろん、自分が仕える王子についてあれこれ語りたい欲求も否
定できない。

「おやおや、厳しい評価だね」

「ある意味身内のようなものですので、どうしても見る目は厳しくなります。それに、
これまでが酷すぎましたので、多少改心したとしてもまだまだトータルではマイナス
です」

身内、という単語を口にするときに、少しだけ誇らしげな気持ちになった。少なく
ともサキにとっては、目の前の従兄よりもレカのほうがずっと身内に思える。

「僕たち商人のあいだでは、王子の評判は急上昇中だよ。……チヴァとの交易を計画
してるんだって？」

チヴァとはマータの東に位置する国で、最近、非常に珍しい商品を各地に輸出する
など、色々な話題を振りまいている。

「……よくご存じですね。まだ先方と非公式な話し合いをしただけなのに」

トップシークレット、とまではいかなくとも、間違いなく機密事項である情報を知られていたことにサキが警戒する。

「蛇の道は蛇ってね。……まあ、きみに嫌われたくないから正直に話すけど、情報源は先方だよ。フットワークの軽い商人はもうあっちとコンタクトとって、ちょこちょこ品を流してるし」

「サツテはそうしないのですか？」

「先行者利益があるならやるよ。でも、どうやらあの国との交易はフェアなものになりそうだし、だったらうちは規模を活かしてじっくり商いをするさ。結果的にはそのほうがより大きな利益を出せる。義父も同意見だよ」

「なるほど、さすがあの伯父が養子に迎え入れただけありますね。うちのエロ王子にもあなたくらい有才覚があればよかったです」

紅茶で唇を湿らせながら、この場には己の主をこき下ろす。

「ふうん……どうやら思っていた以上にきみはレカ王子に期待してるようだ」

サツテは組んだ両手に顎を乗せ、ぐっと身を乗り出してサキを見つめてくる。口元に浮かんだ小さな笑みになにか不穏なものを感じ、サキの瞳に警戒の色が宿る。

「なかなか楽しくなる予感がするね、これは。うん」

「……？」

突然、うんうんと頷き始めた従兄にサキが首を傾げる。

「さて、あまり長話してもレディに嫌われてしまうし、商人にとって時間ほど大切なものもないから早速本題に入らせてもらおうよ」

「はい、なんでしょう」

「サキ、僕と結婚を前提に交際をして欲しい」

従兄の突然の申し出に、サキはなにも言うことができなかった。

返答に悩んだためではない。サツテに返せるのは断りの言葉一択だからだ。

では、なぜか？

その答えは、今、部屋のドアの前に立っていた。

珍妙な格好をした男が、いきなり部屋に乱入してきたのだ。

「何者だ、きみは」

椅子から立ち上がったサツテが、庇うようにサキの前に立つ。少し芝居がかっていると思えてしまうくらいに、その姿は板についていた。

そんな青年の姿を、闖入者が仮面越しに苦々しく睨むのが見えた。

「貴様みたいな女好きの男に名乗る名はない」

声も明らかに苛立っていた。

(……なにをしてるんですか、このバカは)

変態マスクの正体がレカであるのは、一目見た瞬間にわかった。レカのシルエットや瞳をサキが見間違うはずがないのだ。無論、声を聞き間違えたりもしない。

「悪いが、その女はこの怪盗マスク様がいただいでいく。素直に引き渡せ、このエロ男」

(女好きだのエロ男だの、どの口が言うのです)

サッテには見せなかった軽蔑のまなざしを主である王子に向ける。

(それに、なにが怪盗マスク様ですか。せっかく、ようやく、少しだけ、ちょっとだけ、ほんの僅かだけ、これまでの悪評が薄れてきたところで、なにをまたろくでもない真似をしでかすのですか、このバカ王子っ)

可能ならば今すぐにレカの耳を千切れんばかりに引っ張って説教してやりたいところだったが、サッテの手前、ぐっと堪える。

(サッテはレカ様の正体に気づいてないのかしら?)

サッテはサキに背中を向けているため、その表情は窺えない。が、どうやら目の前の変態マスクが自分の国の王子と同一人物とはわかってないようだった。サキとすれ

ば、そうであって欲しかった。

「怪盗マスクとやら、悪いがこの女性を渡すわけにはいかない。彼女は僕の従妹であり、未来の妻となるやもしれん大切な存在だからだ」

「ちょっとサツテ、なにを」

サツテの発言にサキは心底慌てるが、受けた衝撃は、レカのほうがずっと大きかったらしい。変態マスク王子、なにか言おうとするものの声にならないのか、口だけがぱくぱくしている。

「……な、ならばしかたあるまい。気乗りはせぬが、力尽くでサキを奪わせてもらおう」
普段よりも低い声でそう告げると、レカは携えていた剣を抜いた。

「安心しろ間男、抵抗しなければなにもせん。が、そいつを渡さぬのなら、容赦はない。こいつは模擬刀だが、骨くらいは砕けるぞ？」

人生のほとんどをと共に過ごしたサキも、ここまで殺気を放つレカを見た経験はあまりなかった。

(まさかレカ様、私のために……?)

王子の専属メイドとしては、この場をなんとかしても丸く収めなければならないと思うが、一人の女としては、今のシチュエーションが嬉しくてたまらない。

「骨を砕かれるのはごめんだけど、レデイの前でほいほいと逃げるほど、僕も腰抜け

じゃないんだよ」

サツテは壁に掛けられていた剣を取ると、その切っ先をレカへと向けた。

「叔父上ほどじゃないがね、僕も剣の腕には少しばかり自信があるんだよ」

サツテの言葉がはったりではないことは、構えを見ればわかった。

「ふん、ただの商人というわけではないようだな」

「商人は謂われのない恨みを買うケースも多くてね、自分の身は自分で守らないと危ないのさ」

「なるほど。オレには耳の痛い話だ。……今は少々機嫌が悪い、加減も容赦もせんぞ」

「それはこちらのセリフだよ、怪盗マスクくん。……ハアッ！」

サツテが裂帛の気合いととも斬りかかった。サキの目から見ても見事な先制攻撃だったが、防御とカウンターのスキルを徹底的に学ばされた王子にとっては、それが思う壺だ。

「ふんぬっ！」

模擬刀で重い一撃を受け流し、そのままサツテのみぞおちに柄を叩き込む。

「かは……ッ」

サツテがその場に膝を着く。

「安心しろ、峰打ちだ」

「峰打ちじゃないです、それは」

サツテが大きな怪我をしなかったことに安堵しつつ、レカにだけ聞こえるよう、小声でツツコミを入れる。

「よし、さっさとずらかるぞ」

サツテが立ち上がれないのを見て、レカがサキの手を握る。

「セリフがまるっきり悪人ですよ」

「黙っている、こっちだ」

サキの手を引きながら、変態怪盗は廊下に出る。

「出口は逆ですが」

「いいのだ、裏口から脱出する」

「なかなかいい手筈ですね。泥棒に転職なさいますか？」

「どうやら逃亡ルートまで決めてあるらしいことに、サキは感心する。

「黙れと言っている」

「この手際の良さを、今後は普段の政務にも発揮してくださいと助かります」

「……まさか、俺の正体がわかるのか？」

レカが驚愕の表情を浮かべ、

「……まさか、わからないと本気で思ってたのですか？」

サキは、そんな主を見て同じく驚愕する。

「おかしい……なぜわかるのだ。俺の高貴なオーラが勝手に滲み出ていたのか？」

「わからないほうがおかしいです。レカ様は当然おかしいです。そして、滲み出ているのはあなたの腐りかけの脳みそでございましょう」

「おまっ、仮にも王子に対してまた……！」

「おや、私は変態エロマスクに言っただけです？」

「くっ……覚えてるよ、あとでお仕置きだからなっ」

「ご自由にどうぞ」

澄まし顔で答えながらも、内心では淫らな期待を抱いてしまう。

（ああ、まずいわね。私にもゼノビアさんやライヤさんの悪癖が移ってきたみたい）

恐らくは今回の一件にも絡んでいるであろう大切なメイド仲間たちの顔が脳裏をよぎる。

「その角を曲がれば、裏庭から外に出られる。馬車を待たせてあるのだ……ん？」
廊下を曲がったところで、レカが立ち止まった。

「なんの真似だ、おっさん」

二人を遮るように立っていたのは、サキの父であるブゾーだった。

「ここを通りたければオレを倒すがいい、変態小僧」

(話が違うではないか、ブゾーめ！)

模擬刀を構えたブゾーを見て、レカは舌打ちをする。ブゾーに殺気は感じられないが、かと言ってこのまま見逃してくれそうな雰囲気もなかった。

「娘を置いていけば通してやるぞ？」

「自分の女を置いて逃げるバカがどこにいる」

背後でサキが小さく息を呑むのが聞こえたと同時に、目の前のブゾーがにやりと笑う。

「ほお。言うではないか、珍妙な格好のくせに」

「格好のことは言うな！ 俺も気にしてるのだ！」

一番忘れていたかった点を指摘され、レカの顔がかっと熱くなる。

(くそっ、こんな変装させたゼノビアとライヤもお仕置きだ！)

この場にはいないメイドたちへの懲罰(彼女たちにはご褒美だが)を新たに決定しながら、模擬刀をブゾーへと向ける。

(おっさんとやるの、久しぶりだな)

剣の師匠でもあるブゾーのにやにや笑いを睨みつける。こちらから攻めてこないと

確信してるのだろう、余裕たっぷりなのがレカには腹立たしい。

(ふん、俺がいつまでも防御とカウンター一辺倒だと思ってるやがるな。ダークエルフ仕込みの実戦派戦闘術、食らうがいい！)

レカは左の手のひらをブゾーに向けると、

「炎の妖精よ、古の盟約に従い、我が敵を滅せ！」

ライヤに教えてもらった呪文を叫ぶ。

「なっ、魔法!？」

魔法使いとの実戦経験もある元騎士団長は反射的に防御姿勢をとるが、それこそがレカの最初の狙いだった。ブゾーが以前、魔法使いは敵に回すと厄介だと話していたことが記憶にあったからこそのはったり作戦だった。

「隙あり！」

右手の模擬刀でブゾーの左脇腹に斬りかかる。

「ブラフだど!？」

レカが魔法などすぐに使えないと気づいたブゾーは素晴らしい反射で防御に入るが、これもまた狙いどおりだった。

「ていっ！」

レカは途中で剣を手放し、代わりに左手の袖に隠していた目潰しの粉をブゾーの顔

面に投げつけた。と同時に、鉄板を仕込んだ靴で向こう脛を思い切り蹴っ飛ばす。

「くあっ！」

これにはさすがのブゾーも悶絶し、その場に転倒する。

「悪いな、おっさん！……サキ！」

「は、はい！」

サキは父を心配そうに見たものの、すぐにレカが差し出した手を握り締めた。

「さあ、二人で逃げるぞ！　ついて来い、サキ！」

「わかりました、レカ様！」

「違う、俺は怪盗マスク様だ！」

「そういうことにしておいてあげますよ、変態マスク様」

「変態は余計だ、バカ者！」

「あなたにバカ呼ばわりされるくらいなら死を選びます、バカ変態マスク」

そんなバカ丸出しの会話をしながら、王子とメイドは一目散に屋敷から逃げ出した。なぜか、追っ手の姿は一人も見えなかった。

屋敷を出たレカとサキは待機させておいた馬車に乗り、城下町へと向かった。

「城に帰らないのですか？ もう日も落ちましたし、早めに戻りませんか」

「今日は俺も休みにしてある、問題ない。……着いたぞ、ここが今夜の宿だ」

「え。ここは……」

馬車から降りたサキがびっくりしたように何度か瞬きをする。

「ああ、あの姉妹の実家だ。なかなかいい宿屋なのでな、たまに借り切って、城の者たちに使わせている」

この宿屋は、かつてレカを刺そうとした少女の家だった。

「初耳ですが。私に隠れてなにをしてたのですかあなたは」

「待て待て、誤解するな。金はポケットマネーだし、俺自身が利用するのは今回が初めてだ。あくまでも、世話になった者やその家族に使わせてるだけだ」

「ホントですか？」

「嘘ではない。……おい、悪いがこいつに説明してやってくれ」

出迎えに現れた二人の少女に、レカが助けを求める。

「レカ様のおっしゃってることは本当です、サキ様」

「王子様は嘘吐いてませんよ、サキ様」

危うくレカのハーレムに加えられそうだった姉と、姉想いの妹が笑いながらフォロ―をしてくれた。

「……あなたたちがそう言うのでしたら、信じますが」

「お前は俺の言うことも信じろ」

「そんな珍妙な格好をした方に言われましても」

「だから服については言うな。俺が一番つらいのだ。本当につらいのだ」

「レカ様、その格好はどうされたのですか？」

「王子様、それ、変です」

姉妹までもが笑いを堪えながらレカの姿を見ている。

「……色々あったのだ」

あまりの居たたまれなさに、外したマスクをもう一度着用したくなる。着用したら
したで、変態度がさらにアップするからそれもできないが。

「サキ様は綺麗でございますね。凄く似合っております」

「サキ様、いつものエッチな服より、こっちのほうが素敵です！」

「あ、ありがとうございます」

姉妹の賞賛の声に、サキが照れたように微笑む。

そして、なにか言いたげにちらちらとこちらに目を向けてくる。

(ふん、そんな物欲しそうな顔をするな。あとでたっぷり褒めてやる)

姉妹に案内されたのは、二階の一番奥の部屋だった。今日は貸し切りで、宿泊客はサキたちだけらしい。

「俺と一緒にイヤなら、他の部屋で寝てもいいぞ？」

「私はあなたの護衛も担っております。たとえ性欲の化身である淫獣と相部屋であろうとも、拒むわけにはまいりません」

「……お前、そんな調子である男とも会話してたのか？」

「まさか。私がこうした罵詈雑言をぶつけるのはレカ様だけでございます」

「罵詈雑言の自覚はあるのだな」

はあ、と息を吐きつつ、レカがベッドに腰を下ろす。かなり疲弊しているようにサキには見えた。

「お疲れみたいですな」

「当たり前だ。まったく、とんだ一日だったぞ。俺に黙って見合いなぞ、二度とするなよ、サキ」

「私はあれが見合いなどとはまったく知らなかったのですが」

「なるほど。その点では、お前も被害者だが」

「被害者……確かにそうですね。せっかくの良縁をどこかの誰かさんにめちゃうちゃにされたとも考えられるわけですし」

そう言っサキは、にやにや笑いながらレカを見る。

「ふん、お前に普通の結婚などません。諦めろ」

「ずいぶんと横暴でございますね。何様ですか」

「王子様だ。ご主人様だ。レカ様だ。……お前の人生は俺のものだ、他の男にはやらん。絶対にだ」

身勝手な、けれどサキにとっては最高の言葉に、メイドの胸が歓喜に熱くなる。

「そのような珍妙な変装までして見合いの場からメイド一人を拉致とは、物好きな方でございますこと」

勝手ににやける頬を引き締めつつ、照れ隠しに早口で言う。

「なんとでも言え。……しかし、よく似合っているな、そのドレス」

「……今さらですか」

「いや、ずっと言おう言おうとは思ってたのだがな。……まあ、お前はなにを着ても似合うし可愛いし美しいが、こういったフォーマルなドレスは特にいいな」

「な、な、なにを」

せっかく引き締めた頬が、一瞬にして緩んでしまった。

「考えてみたら、先日のパーティーのときもお前はメイド服だったしな、ずいぶん久しぶりではないか、ドレス姿は」

「どこかのエロ王子が欲望丸出しのエプロンドレスを強制いたしましたからね」

「メイド服に関してのクレームは一切受けつけないぞ。絶対に、そう、絶対にだ」

「無駄に凜々しい顔と声で、ろくでもない主張をしないでくださいませ。情けなくなります」

「お前、俺にメイド談義させる気か？ 長くなるぞ、それこそ夜通しで、朝まで語るぞ、俺は」

「そのやる気を仕事に向けていただけるとホントにありがたいのですけれど。……夜通し、という点に関しては別にかまいませんが。慣れてますし。慣れてますし」

「どうして二度言う。確かに残業はよくあるが、夜通しの仕事はさすがにそれほどないはずだぞ？」

「いえ、仕事の話ではございません。夜伽のことです。毎夜毎夜、よくも飽きずに私たちを部屋に呼びつけるものだな、と呆れ……感心いたしました」

サキたち三人のメイドが勝手に寝室に押しかけている、が正しく、もはや夜伽ではなく夜這いと表現したほうがぴったりののだが、レカは特に反論しない。

「お前らみたいな最高のメイドが側にいて、手を出してもオッケーならば、俺は遠慮などせん。するわけがない」

最高、という褒め言葉は嬉しくもあり、少しだけ物足りなくもあった。ここでの「最

高」が示すのは自分だけでない点が不満なのだ。無論、「お前ら」が「お前」であればもっと嬉しいだろう。

サキはもう、この幼なじみの王子が性欲の化身である点を諦めている。ゼノビアとライヤの存在も認めている。

ここに新たな女が加わるかもしれない事態も、できればそうならないで欲しいと願いつつも、半ば覚悟している。

最近、城内でよく見かけるようになったダークエルフのミラなどはまさにその筆頭だし、それこそこの宿の姉妹だって怪しいものだ。少なくとも、先程あの二人がレカに注いでいた視線は、以前とはまるで違っていた。

（最高、だけですか？ 他に付け加えるべき言葉はございませんか？）

だからこそ、サキはレカからの追加の言葉を待ち、欲し、望んだ。

「……」

もの言いたげな視線も注ぎ、催促をする。

「に、睨むな」

「睨んでなどおりません。私の目つきが悪いのは生まれつきです。あの父に似てしまったせいですし、ここ数年、さらに悪化したのはもちろんレカ様のせいでございますが」

「くっ……お前、なんでもかんでも取り敢えず俺の責任にしておけばいいとか思っていないか？」

などとぶつぶつ言いつつも、

「まあ、俺のメイドたちの中でもサキは特別だからな。今日のことでもわかったと思うが、俺はお前を手放すつもりなんてかけらもない。諦めろ」

最後にはちゃんとこちらの望みを叶えてくれるのがサキの主なのだ。

「そうですね、また見合いなどしようものなら、どこかの独占欲が強いエロ王子が騎士団派遣しかねませんからね」

「ふふん、俺はライヤのために実際に騎士団を派遣した男だぞ」

「そんなこともございましたね」

ダークエルフの里に乗り込んでからまだそう時間は経っていないのに、ずいぶんと昔に感じるのは、それだけ様々なことが立て続けに起きたためだろう。

「……で、なんでお前、さっきから突っ立ったままなんだ？」

ベッドに腰かけていたレカが不思議そうにサキを見上げる。

「お前にそうされると、なにかこう、お説教されてる気になって落ち着かん」

「主に断りなく勝手に座るわけにはいきませんので」

「いやいや、いつも勝手に座ってるだろ」

「それは二人きりのとき、プライベートの話です」

「今は二人きりだし、プライベートだが？ 俺もお前も、今は完全にオフだが？」

「立ってようが座ってようが、私の勝手でございます」

「確かにそうだが……ん？」

幼なじみメイドの意図がわからないのだろう、首を傾げていたレカの顔にさらに困惑の色が滲む。サキが、今度はその場でくるとターンをしたためだ。

「ちょっと回ってみようが、これも私の勝手でございます」

右回りに続いて左回りでもターンする。

もちろん、先程褒められたドレスをアピールするための行為だ。

（ここまですればおわかりですよ？ あなたの特別で最高なメイドが今、なにを欲しているか、今度もちゃんとお察しくさいます）

似合う、可愛い、美しいと賞賛してもらったが、もう一押しが欲しかった。

なにしろ、こうして二人きりになれるチャンスなどそうそうないので、「特別な」存在たる王子専属メイドとしては、ライバルたちに対して少しでもアドバンテージを稼いでおきたかったのだ。

（わかってますよ、ええ、私がレカ様にとって唯一無二の特別な女であることは。それくらいの自負は持っています。ただ、それで無条件に安心するには、あなたはあまり

にも女好きすぎるのです)

今日、親類の結婚式のためにサキが選んだのは普段のエプロンドレスと同じく赤を基調としたドレスだ。レカ王子渾身のエロエロデザインであるメイド服に比べれば、当然のように肌の露出は低い。

けれど、剥き出しの肩や背中に加え、スカートのスリットから覗く脚の美しい曲線や白い肌は、いつもの格好とは異なる魅力や色香を放っていた。少なくとも、レカの視線を惹きつけるくらいには。

(私が気づいてないとも思っていましたか？ あなたがちらちらと私の肩や胸元、脚を視姦してたことに。私の裸なんて毎日見てるでしょうに、ホントに底なしのスケベでございますね)

三回転目に入ろうとしたところで、レカが苦笑いしながら口を開いた。

「おい、もうわかったから止まれ。見ているこっちの目が回る」

「性能の低い三半規管ですね。悪いのは頭と性格だけにとどめておいてください」

「息をするように自然に俺への暴言を吐くのもやめろ。……いいから少しじっとしていろ。これはご主人様による、メイドへの命令だ」

(命令?)

なぜここでそんな命令をする必要があるのかと訝しみつつも、取り敢えずは素直に

従っておく。

「……………ふむ」

レカは立ち上がると、動きを止めたサキの周りをぐるぐる回り始めた。様々な角度からドレス姿を観察されるのは嬉しい反面、恥ずかしさも募ってくる。

「な、なにをなさってるのですか、エロ王子」

「んー？ 生意気なメイドが俺の賞賛を露骨にリクエストしてきたからな、どこをどう褒めてやろうかとじっくりみっちりねっとり考えているところだ」

「わ、私は別にそのようなことは」

「それならそれでもかまわん。どうせ思ったことを素直に口にすれば、そのままお前への賛美となるからな、楽なものだ」

「くっ……………！」

サキの耳がどんどん赤くなるのを見て、レカが意地悪く唇を歪める。日頃虐げられている仕返しなのかもしれない。

「やはりお前には赤がよく似合うぞ。メイド服も赤を基調とした俺の目に狂いはなかったな。が、他の色もきつとお前の魅力をより引き出すだろう」

「……………」

「俺以外の男の前という点は気に食わぬが、確かにこのきめ細やかな肌を隠すのは、

美の神への冒瀆にも等しいな」

「……！」

「一步間違えば下品になりかねない肌の露出も、お前くらい品のある女ならば、美しさとなる。これほどの素晴らしいメイドを持っている王子など、世界広しといえど、俺だけだな」

レカはうんうんと頷きながら、様々な角度からサキを見つめ、次々と賞賛の言葉をぶつけてくる。真面目に言っているのがわかるだけに余計に照れくさい。

（う、嬉しいのですが、嬉しいのですが……顔が熱くてたまりません……！）

耳だけでなく目元や頬をピンク色に染める幼なじみの反応に、レカがにやにやと笑う。もし、からかうのが目的であったなら即刻やめさせるところだが、本心から褒めてくれているのもわかるだけに質が悪い。

「今日の結婚式は、どうだったのだ？」

「どう、と言われましても……普通の式、だったと思いますが」

「いや、そうではなくてだな」

「？」

レカがわずかに口籠もる。

「あ……お前はこういう色以外のドレスを着たいとか思わなかったか、と聞いている

んだ」

「……………ああ」

主がなにを言いたいのか、ようやくわかった。同時に、専属メイドの肌がますます赤くなる。

「わ、私も一応は若い女ですから、花嫁を見て多少、若干、いくらか、わずかにあの白いドレスに心が動きました」

「そ、そうか。お前にもやはりそういう夢はあるんだな」

「ま、まあ、あなたに仕えることが決まった時点で、そのような幸せはとっくに諦めておりますが。幸せというか、人生そのものを、ですが」

「そこまでか!？」

「そこまででございます。私は身も心も人生も、レカ様によってキズモノにされてしまった、憐れな女です」

ゼノビアならここでお得意の『不幸ですわぁ』が続くところだが、当然、サキはそんなセリフは口にしない。代わりに、少し潤み始めた瞳で己の主を見つめる。

「……………着てみたい、か？」

「着られるものでしたら一度くらいは、と思いますが、それほどでもないです。別に、ウェディングドレスそのものが目的ではありませんし」

言外に、ずっと心に秘めていた、そしてずっと秘めておくべきだった願望を仄めかす。

「……もうしばらく待ってろ。お前にふさわしい王子に、いや、王になったときにはなんとかする、つもりだ」

「レカ様が立派な王になられるという前提の時点ですでに絶望的ですし、奇跡的に実現したとしても、きっとその頃にはあの愚かな計画が復活してるでしょうから、あまり期待しないでおきます」

これまた言外に、多少は期待しています、と仄めかす。

「くっ、お前が俺を見直すのはいつなんだ」

「これまでご自分がしでかしてきた悪行の数々を思い出して反省してください。きっと、それだけで余裕で夜が明けますが」

「ふん、俺は反省はするが、必要以上に過去は振り返らぬ男だ。そんな不毛なことでせつかくの二人きりの夜を台無しになぞせんで、サキ」

「あ……っ」

レカはサキの背後に回ると、耳に息を吹きかけながら言った。真っ赤になった耳たぶよりもさらに熱い息に、赤いドレスに包まれた肢体がぶるりと震える。

（ああ、レカ様のオチ×ポ、もうがちがち……あん、そんなにぐいぐい押しつけない

いってくださいませ、ドレスにあなたの卑猥な汁がついたらどうするんですか。これ、今日下ろしたばかりなんですよ？」

尻に当たる熱くて遅しいイチモツに、サキの腰が勝手に左右に揺れ出す。

「こ、今夜も私に夜伽をさせるのですか？　ここは城ではないのですよ、わかってるのですか？」

股間が潤み出すのを感じつつ、形だけの警告を発する。当然、ただのポーズであり、本気でレカを拒むつもりなどない。

「宿は貸し切りと言っただろう？　安心して、いつものようにエロくて可愛い喘ぎ声を俺に、俺にだけ聞かせればいい」

「んふんっ！」

耳の穴に舌が潜り込み、続いてドレスの上からバストを揉まれた。強すぎず弱すぎない絶妙な力加減なのは、それだけサキの女体を知り尽くしている証拠だ。

膨らみの頂点を指でまさぐりながら、唇と舌が次々と十九歳の鋭敏な柔肌を這ってくる。うなじ、首筋、そして肩口にキスされ、舐められ、吸われるたびに甘い吐息が漏れるのを堪えられない。

「はぁ……あん、んん……んう……くふ……ん」

「今日はいつもよりいい匂いがするぞ、サキ」

「あっ……イヤ！」

突然、レカが剥き出しの腋窩に鼻面をねじ込んできた。すんすんと鼻を鳴らして匂いを嗅がれ、汗ばんだ肌を舐められる羞恥に、甲高い声を上げてしまう。

「お、おやめくださいレカ様……そこは……アアッ！」

どこで覚えたのか、最近のレカはこうしてときどきメイドたちの腋を責めてくる。一番恥ずかしがるせいか、特にサキに対して腋責めをしてくることが多い。

「今日はいい天気だったし、逃げるときに走ったりもしたからな、汗をかくのは当然だ。恥ずかしがる必要はないぞ？」

意地の悪い王子はれろれろと窪みを舌先で舐め回し、気の強いメイドへの辱めを続ける。

「お、怒りますよレカ様……くっ……あっ、はあん……ダメ……そこはホントにダメですう……んっ、はっ、はくウ！」

腋をいじめられつつ、乳首をつねられ、ヒップに猛々しいペニスを押しつけられては、サキに勝ち目はない。抵抗の声も急速に弱まり、代わりに荒い呼吸音と、鼻にかかった喘ぎが二人きりの部屋に響く。

気づけばドレスの胸元からは乳房がこぼれ、はしたなく勃起した先端をつままれていた。女の意識を別のところに引きつけ、その隙に服を脱がしたり、動きを拘束する

テクニックの上達ぶりには目を見張るものがある。

(聞の技だけうまくなるだなんて、ホントにエロい王子です、あなたは……！)

当然、愛撫そのものも巧みになっている。サキ・ゼノビア・ライヤ、この異なる三人のメイドを毎晩相手にしているのだから、経験値の蓄積スピードは凄まじい。

また、幸か不幸か、レカは女の反応を読み取ることに長けていた。つまり、相手が本気で嫌がっているか否かの判断が的確で、言葉だけの拒絶など簡単に見破るのだ。今のところ、本人にその自覚がないのが唯一の救いだった。

(この方はいずれ、私たち以外の女も抱くかもしれない。でも、そうであっても私は一番近くにいたい、レカ様の特別な女であり続けたい……っ)

独り占めが無理ならば一番になりたいという想いは、ある意味、より傲慢な、わがままな願いだともわかっている。でも、諦めるつもりなど毛頭なかった。

「レカ様」

「ん、なんだ？」

「私をキズモノにした責任、取ってくださいますよね？」

レカの手を腹部に導き、甘い、媚びた声で囁く。

「ああ、無論だ。腹の傷も、お前の人生も、全部引くくるめて俺が面倒見てやる」

「はあああっ……んあっ……ああんっ!!」

腹への愛撫と嬉しすぎるセリフの同時攻撃の前に、サキはこの夜最初の絶頂を迎えるのだった。